

## 命の泉の聖所

—— コンスタンティノポリスのピギ修道院再考 ——

太 田 英侖奈

### はじめに

今日トルコ語でバルクル・メリエマナ・ルム・マナステイル (Balıklı Meryem Ana Rum Manastırı) と呼ばれる<sup>(1)</sup>コンスタンティノポリス (現イスタンブール) のピギ修道院 (命の泉の聖母修道院、Μονή τῆς Θεοτόκου τῆς Πηγῆς) は、かつてビザンティン帝国の全史を通じて奇跡的な治癒のトポスであった。その聖なる水によって病や怪我を癒すと云われたアギアズマ (ἀγίασμα, 聖なる泉) には、今も地元住民や観光客が訪れる。ピギ修道院はアギアズマを擁していたビザンティン時代の聖堂や修道院として最も重要なものの一つで、文献上の記録も比較的よく残っている。ピギのアギアズマで起きた治癒の奇跡に関する伝説は早くも5世紀に遡り<sup>(2)</sup>、コンスタンティノポリス市民の崇敬を集めていたことは明らかである。しかし、修道院の考古学的コンテキスト、つまり構造や装飾については、ほとんど何も解明されていない。帝都の宗教的建造物を網羅したレーモン・ジャンンの *La géographie ecclésiastique de l'Empire byzantin* (1969) では、主聖堂についてはある程度の記述があるものの、アギアズマに関しては言葉少ない<sup>(3)</sup>。これまでピギ修道院一帯で考古学的調査が行われたことはなく、文献上の記録も断片的ではあるが、それでもなお修道院の考古学的コンテキストを考察する意味はあると筆者は考える。本論文は、主に一次文献上の記録を通じてピギ修道院の地理、構造、装飾について考察する。まず、修道院の大まかな立地を述べる。次に、修道院コンプレックスを形成していた各建造物の歴史と成立順序を追った後、これら建造物の構造と、建造物同士の関連について分析する。最後に、修道院の装飾について考察する。

### 立 地

ほぼ確実にピギ修道院の跡地に造営されたバルクル・メリエマナ・ルム・マナステイルは、イスタンブール南西の外れにあるゼイティンブルヌ地区にある。この区域はテオドシオス城壁のすぐ外側にあたり、市内に通ずる門としてはピギ門 (シルヴィリ・カプ) が最も近い。プロコピオス (6世紀、生没年不詳) が著した『建築について』を繙くと、ピギ (泉、水源) という名称は修道院があった一帯の地名に由来することが判る。

彼〔ユスティニアノス1世〕はピギという場所で、もう一つ聖母への聖堂を捧げた。そこには糸杉の鬱蒼とした木立と聖堂所属地の真ん中に花が豊かに咲く柔らかな土地があり、美しい灌木でいっぱいの園、そして静かに泡立ちながら甘い水の優しく流れる泉——これらのものはとりわけ聖域にふさわしい〔……〕これらの聖堂〔ブラケルネ修道院とピギ修道院〕は二つとも〔陸側の〕城壁の外に建つ。一方は海沿いの城壁の始まる場所に、もう一方は黄金門と呼ばれるもののそばで、偶然ではあるが砦の終点近くに、両方とも都を囲む城壁の無敵の守りとして機能するように<sup>(4)</sup>。

プロコピオスはピギ修道院を帝都の守護者と断言している。実際のピギ修道院はプロコピオスが主張するほど海にも黄金門にも隣接していない。1940年に『建築について』を英訳したデュエイングとダウニーが指摘したように<sup>(5)</sup>、プロコピオスとともにユスティニアノスの創建になるブラケルネ修道院とピギ修道院を並列することによって、帝都の守護聖者たる聖母マリアの修道院の「空想的な配置」を説明しなかったのかもしれない。ただし、地理的事実はどうあれビザンティン人がプロコピオスの記述する通りに二つの修道院の関係を思い描いていた可能性を否定するものではない。ここで対として挙げられているブラケルネ修道院とは異なり、ピギ修道院は最後まで城壁の中に取り込まれることはなかった。

### 各建造物の歴史と成立の順序

バルクル・メリエマナ・ルム・マナスティルの現在の建物は1835年に竣工した<sup>(6)</sup>もので、基本的にはビザンティン時代の構造を保っていない。ビザンティン時代の修道院が辿った命運は詳らかにされていないが、1422年にオスマン帝国のムラト2世（1404～51年）がコンスタンティノポリスを攻略しようとした際にピギ修道院主聖堂に攻撃拠点が置かれている<sup>(7)</sup>ため、少なくともこの時点ではまだ存続していたことがうかがえる。ところが、コンスタンティノポリスを1547年に訪れたフランス人旅行者のピエール・ジルは、ピギ修道院はアギアズマを除いて何も残っていないと記している<sup>(8)</sup>。修道院は1453年の首都陥落時に破壊されてしまったのだろうか<sup>(9)</sup>。ともかく、今日のバルクル・メリエマナ・ルム・マナスティル周辺で、かつて修道院の一部をなしていたであろう荘厳な建物の痕跡は見つけられない。したがって、かつてのピギ修道院の概観を知ろうとすれば、一次文献の記録に頼るほかない。

修道院コンプレックスには主聖堂と宮殿<sup>(10)</sup>があったことが判明している。11世紀の詩<sup>(11)</sup>に詠われているように、葡萄園があった可能性もある。「ピギの聖母修道院」と呼ばれていたからには修道僧のための僧坊や食堂といった施設もあったはずだが、どの文献にもそのような施設は登場しない。ある逸名筆者によると、こうした修道院の主要な建造物が建てられる以前から、修道

僧の起居する礼拝堂が当地にあったという<sup>(12)</sup>。修道院コンプレックスを成す建造物の成立順を考えるにあたって、おそらく後に主聖堂に発展した「聖堂」もしくは「礼拝堂」が最初に建立されたとするのが妥当な推測であろうが、その創建年代については問題が多い。プロコピオスが聖堂の創立をユスティニアノスに帰するところはすでに述べた通りである。ゲオルギオス・ケドリノス（12世紀ごろ、生没年不詳）は、ユスティニアノスとその治世33年目に「泉の聖母の礼拝堂」を建立した、とより詳細な年代を与えている<sup>(13)</sup>。ユスティニアノスの治世33年は559/560年に相当する。最初の礼拝堂がユスティニアノスの発願によることについてはヨアンニス・ゾナラス（1159年以降没）も同意している<sup>(14)</sup>。ところが、14世紀のニキフォロス・カリストス・クサントプロス（1256以前～1335年ごろ）はレオン1世（400～74年、在位457～74年）が奇跡的に泉を発見し、通称「カタフィギ（καταφυγή, 避難所）」と呼ばれた聖堂を建てさせたのだと書き記している<sup>(15)</sup>。自身に約700年先んじる歴史家たちがユスティニアノスを創建者としているにも拘わらず、なぜクサントプロスがユスティニアノスよりもさらに古い皇帝であるレオン1世にピギ修道院の縁起を帰したのかはわからない。クサントプロスはブラケルネ修道院の歴史を語る際にもブルケリア（399～453年、在位414～453年）を創建者として持ち出しており、やはりプロコピオスその他の歴史家の記述と噛み合わない<sup>(16)</sup>。プロコピオスの『建築について』がユスティニアノスの業績を称えるために執筆されたものであること、ケドリノスとゾナラスがプロコピオスの記述を盲目的に筆写したに過ぎない可能性もあることは充分考慮すべきであるが、帝国の衰退の時期にあって、クサントプロスが聖堂の来歴の古さを誇張していたとみてもおかしくはないだろう。

もう一方の主要な建物である宮殿については、いつごろ建造されたかまったく不明であるが、959年までに成立した<sup>(17)</sup>と考えられている『儀典の書』1巻18章に登場しているので、少なくとも10世紀前半までには存在していたといえる。パレオロゴス朝期にはこの宮殿で皇帝家の儀式が執り行われることもあったが、1375年にアンドロニコス4世パレオロゴスが宮殿内で父帝ヨアンニス5世パレオロゴスおよび弟マヌイル2世パレオロゴスを捕縛したという事件<sup>(18)</sup>以降、ピギ宮殿は記録から姿を消す。

### 建物の構造と相互関係

これまでバルクル・メリエマナ・ルム・マナスティルの敷地から出土した遺物としてはわずかに大理石の柱が数本あるに過ぎない。ミュラー＝ヴィーナーはイスタンブールのグランド・バザール近くのバヤズィト・ジャーミイがピギ修道院のスポリアを利用して建てられたと主張しているが<sup>(19)</sup>、これを確かめる術はない。幸い、クサントプロスが主聖堂の構造について詳細なエクフラシスを『ロゴス』と『教会史』の両著作に残しているので、ここでは前者を以下に引用したい。

[……] 元々レオン1世によって聖母の栄光に捧げられた聖堂は泉の上に地中深く基礎を据えられ、その深さと同じ分だけ地上にも聳えていた。聖堂は長方形で、長さは幅の3倍あった。アーチに支えられたドーム天井があり、豊富な光を確保するため窓が開けられていた。天井は黄金のモザイクで覆われ、壁はきらめく大理石で化粧された。聖堂の両側には泉に降りる大理石の欄干を備えた25段の階段があった。泉は聖堂の中央の12フィートほどの幅がある長方形の空間にあり、大理石のパラペットで区切られていた<sup>(20)</sup>。

これが、14世紀初頭のピギ修道院主聖堂の様子であった。『教会史』においても、クサントプロスの語る内容はほぼ同じである<sup>(21)</sup>。ジャンナンが指摘したように、クサントプロスの記述の問題はこれらの構造物をすべてレオン1世治世下に遡らせている点にある<sup>(22)</sup>。もし創建時の一部が14世紀まで残っていたとしても、そのすべてが度重なる地震を耐えたとは到底考えられない。ピギ修道院は少なくとも2度、地震による被害を受けた。偽コディノス（14世紀、生没年不詳）は女帝イリニ（752ごろ～803年、在位797～802年）が「ユスティニアノスによる創建の267年か270年後」に修道院を襲った地震で損壊した主聖堂を修復したと記録している<sup>(23)</sup>。その後、再びバシリオス1世（830/835～886年、在位867～86年）が869年の地震で崩落したドームを架け替えた<sup>(24)</sup>。聖堂は自然災害だけでなく、人為的な災害も被った。レオン6世（866～912年、在位886～912年）は蛮族に破壊されたナルテクスを修復した<sup>(25)</sup>。924年にはブルガリアのシメオン1世（863-65～927年、在位893～927年）が修道院に放火した<sup>(26)</sup>。また、ラテン帝国がコンスタンティノポリスを占領していた間はピギ修道院でもカトリックのミサが奉じられていたため、主聖堂の内部がラテン教会の典礼に沿うように一部変更された可能性もある<sup>(27)</sup>。

クサントプロスによると、主聖堂にはそれぞれ聖エウストラティオス、聖アンナ、そして聖母マリアに捧げられた3つの礼拝堂があった。しかし、これらの礼拝堂が主聖堂のどこに位置していたのかは杳として知れない<sup>(28)</sup>。主聖堂内の様子をもう少し知りたければ、『儀典の書』におけるキリストの昇天の祭礼に関する記述<sup>(29)</sup>を読むのがよい。曰く、皇帝は黄金門港で下船すると、城壁を右手に見ながら騎馬でピギ修道院に向かう。修道院に到着するとまずアトリウムに入り、聖堂内に通ずるアトリウム右手の扉を通して螺旋階段を昇る。上階に至ると、細長い広間、小さな衣裳部屋、そして居室があった。アトリウムの扉を通った直後に螺旋階段が出現し、かつその先にあった広間が「狭かった」とあるので、これらの部屋は主聖堂のナルテクス上階にあったものと考えるのが自然であろう。また、皇帝と隨身が「説教壇の右側を通してソレアに至る」とあるので、説教壇は身廊の左側に設置されていたことが判る。

今日、ビザンティン時代の構造を僅かに残しているのは、アギアズマの部分である。先述したように、アギアズマは主聖堂の中央にあり、聖堂の両側から延びた階段で降りられるようになっていた。ここで、14世紀のアギアズマがどのような様子であったかを、再びクサントプロスの『ロゴス』

から引用しよう。

長方形〔アギアズマの床面〕の両辺から6段の階段が延びており、泉の上部へと昇れるようになっている。泉の開口部の前には穴の開けられた水盤が立っていた。水が流れるようにするためである。クリプトは覆われた水路で2つに分けられていた。水路には開口部が2つあり、1つは円い石で蓋をされ、いま1つからは係の者が神聖なる浄めの泥を乳棒形のシャベルで掻き出していた<sup>(30)</sup>。

『ロゴス』の他の箇所では、アギアズマに降りる階段の欄干を支える柱は12フィートの高さがあり、黒い石材でできていたと記されている<sup>(31)</sup>。クサントプロスの記述は、大筋において今日のアギアズマの様相と合致するとウスターハウトは述べる<sup>(32)</sup>。聖堂は1727年と1835年の2度に亘って再建された<sup>(33)</sup>にも拘わらず、アギアズマは今も地下にあり、クサントプロスの語る通り泉の上部へと延びる階段も確認できる<sup>(34)</sup>(図1)。ピギ修道院一带の学術調査を行ったダークとエズギュミュスは、アギアズマに関して興味深いコメントを残している。曰く、アギアズマに降りるL字形の階段が折れ曲がる箇所に、円い開口部(図3、③)があるというのである。この開口部は、壁面にビザンティン時代のものと思われるピンク色の漆喰や黄味がかかった白色モルタルで積まれた煉瓦が見えるトンネル(図2)に通じている<sup>(35)</sup>。のみならず、トンネルにはわずかに絵の具の断片も確認され、ダークとエズギュミュスはこれをフレスコの痕跡と考えている。彼らはアギアズマの反対側、「泉の後ろにある階段のそば」に、もう1つの開口部を発見している<sup>(36)</sup>。これは、アギアズマの左にある壁龕の底にあるものと考えられる(図1および図3、④)。今日貯蔵庫として活用されているこれらのトンネルについて、ダークとエズギュミュスはビザンティン時代の構造が残ったものとは推定したが、その本来の機能を特定するには至らなかった。筆者はこれらのトンネルこそ、クサントプロスの語る「覆われた水路」の一部に相当するものと



図1 現在のアギアズマの様子



図2 アギアズマに接続するトンネル

考える。もしそうであるならば、L字形階段の途中にあらわれる開口部が「円い石で蓋をされた」方の開口部であろう。クサントプロスの記述が妥当なものであるとして、これらのトンネルがどのように「覆われた水路」と接続していたかについては、より詳細な考古学的調査を行わない限り判明しないだろう。これまで引用した一次文献上の記述と、ダークとエズギュミュスによる以上の発見を総合すると、図3に示すような復元案を描くことができる。

主聖堂については以上のように多くの注意が払われているにも拘わらず、宮殿についてはほとんど何も判っていない。ジャンンは宮殿を主聖堂の北側に配置している<sup>(37)</sup>が、どのような根拠に基づいてこうした配置にしたのか不明である。

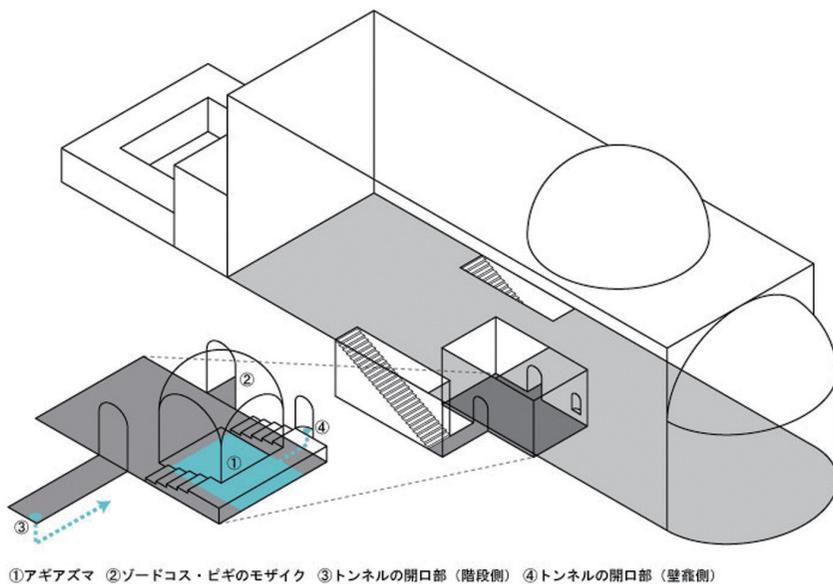


図3 ピギ修道院主聖堂復元案

### 各建造物の装飾

ピギ修道院の装飾に関しては、比較的豊富な一次文献上の証言が残っている。まず、主聖堂は相当数のモザイクで飾られていた。一時病<sup>(38)</sup>を得たがピギのアギアズマにより恢復した女帝イリニは、イコクラストによって破壊されてしまった聖母子の図像を修復させた。その上、彼女自身と息子のコンスタンティノス6世（771～805年以前、在位780～97年）の肖像を新たにモザイクで造らせた<sup>(39)</sup>。レオン6世は蛮族に破壊されたナルテクスを修復させた際、ナルテクスのフレスコをモザイクに造り変えさせた<sup>(40)</sup>。

モザイク以外の主要な装飾は言うまでもなく、フレスコである。これについてもクサントプロスの記述により、いくつかの主題が判明している。すなわち、「聖霊降臨」、「磔刑」、「変容」、「キ

リストの神殿奉獻]、「携香女」、そして「昇天」である。こうしたキリスト伝サイクルは10～14世紀の聖堂装飾に頻出するが、場面の選定をみるとおそらく十二大祭サイクルが描かれていたものと思われる。イグナティオス・マギストロス・グラマティコス（生没年不詳）はこれらの場面について5つのエピグラムをものしており、そのおかげで我々は「昇天」がドームに描かれていたと知ることができる<sup>(41)</sup>。アンドロニコス2世および3世に仕えた宮廷詩人、マヌイル・フィレス（1270ごろ～1330年代）は、ガブリエルという名の僧がキリスト、カッパドキア3教父、聖オヌフリオスと柱頭行者シメオンの姿を描いたと記録している<sup>(42)</sup>。さらに、クサントプロスは聖アガトニコスの図像と彼にまつわる奇蹟を描いた二つのタブローの存在に言及している。「図像」の媒体は何であったか詳らかでないが、「タブロー」がイコンを指しているのは疑いない<sup>(43)</sup>。

この聖堂の装飾で最も興味深いのはおそらくクリプト、つまりアギアズマのそれであろう。アギアズマの周囲にはその水によって癒された信者たちの奉納物が納められていた<sup>(44)</sup>が、なかには自らの治癒体験を描かせた者もあったという<sup>(45)</sup>。そのどこかには聖母のイコンがあり、レオン6世妃ゾイ・カルボノプシナ（920年以降没）はこのイコンと同等の長さの絹布を体に巻き付けることで不妊から癒された<sup>(46)</sup>。ということは、イコンはそれなりの大きさ——少なくとも女性の胴回りと同じ程度の高さ、もしくは幅であったことになろう。このイコンは、悪霊に憑かれた女がその前に掲げられたランプの油を飲んだら癒された、という「エписケプシスの聖母」イコン<sup>(47)</sup>と同一であったかもしれない。エписケプシス（ἐπισκέψις、助け）とは、一般的には半身



図4 《ニコピオスの聖母》イコン、ヴェネツィア、サン・マルコ聖堂



図5 大理石聖母イコン、マクリニツァ（ペリオン）、オクシア・エписケプシス修道院

像の聖母が胸の前で幼児キリストを掲げる図像に付される<sup>エピセツト</sup>銘文である<sup>(48)</sup>。第4次十字軍の際にコンスタンティノポリスからもたらされたと伝えられるヴェネツィア、サン・マルコ聖堂所蔵の「ニコピオスの聖母」イコン(図4)がその典型である。ところが、「エピスケプシスの聖母」タイプに分類されているにも拘わらず「ニコピオス(νικοποιός, 勝利をもたらす者)」の名で呼ばれていることから自明のように、エピスケプシスというエピセツトがつく聖母図像は複数ある。ビザンティン美術における聖母図像の各タイプとエピセツトの対応関係はとかく錯綜している<sup>(49)</sup>。13世紀の大理石イコンにエピスケプシスの銘が添えられた聖母像(図5)<sup>(50)</sup>があるが、それは胸の前に幼児キリストのメダイオンを伴うオランス(祈り)の聖母の全身像であって、「ニコピオスの聖母」イコンの図像とは大きく異なる。しかし、仮にピギのアギアズマにあった「エピスケプシスの聖母」イコンにオランスの聖母像が描かれていたとしたら、アギアズマの天井にあったモザイクの聖母図像と図像的なタンデムを成していたことになる。そのモザイクについて今一度、クサントプロスの記述を引用しよう。

というのも、その場所[カタフィギ]全体にあらゆる種類のモザイクでできたイコンがあり、キリストとその聖なる母のそれは特筆に値する……[中略]……その画は聖堂の天井がある場所、ドームの中央にあるのだが、画家は自らの手で命を与える源[聖母]を完璧に描いて見せた。彼女の胸には最も美しく、不滅なる御子が命あって躍動する透き通った飲み水のように、浮き上がっている<sup>(51)</sup>。これを見た者はそれ[聖母]を、音もなく降る雨のように頭上からやさしく流れ落ちる水に喩えたくなるだろう。そして[彼女は]そこ[頭上]から水盤の水を見下ろしており、そうすることによってより[水盤の水は]効果的に、豊かさをもたらされているのである。私はさしあたってこれ[泉]を水に浮かぶ主の魂と呼びたい。ともかく、[聖母子のモザイクの]反対側にある栓が水を止めるために引き上げられると、ぼんやりとした像が水面に映りこみ、まるで鏡であるかのように、神の母ご自身が生ける水に浮かび、超自然の光を発しているかのごとく見えるので、これを見る者はどちらがより信じられるのか[どちらが実際の図像なのか]考えてしまうほどだ。つまり、水の中の像が上方に移され、その像が不思議にもかなりの日光ではね返って水を打ち、そして天井に保存されているのか、と[……]<sup>(52)</sup>

ここでクサントプロスが「クリプトの天井」ではなく、「聖堂の天井」と言及している点には留意しなければならないが、タルボット<sup>(53)</sup>やテトリアトニコフ<sup>(54)</sup>に倣い、この聖母子のモザイクは聖堂の主ドームではなくクリプト天井のドーム状に窪んだ部分にあったと考えるのが妥当であろう。現在のアギアズマを見ても、天井のドーム状に窪んだ部分の四隅から柱を通して、キボリウムに見立てている様子がうかがえる(図1)。おそらく10メートルを優に超すような高いドーム

## 命の泉の聖所

ムにあるモザイクが、果たしてクリプトの小さな水盤に映り込んだであろうか。ただし、「日光」によって像が水面に映っていた、という旨の記述から、アギアズマのあるクリプト空間は天井が一部吹き抜けになっていたと考えられる。ウスターハウトが指摘したように、このモザイクはゾードコス・ピギの標準的なイコノグラフィーを採用していたに違いない<sup>(55)</sup>。クサントプロスの記述からは、聖母子のモザイクが比較的最近完成された様子が読み取れるとテトリアトニコフは指摘しており、したがって1306~1313年に施工されたのであろうと結論付けている<sup>(56)</sup>。

さて、今あっさり「ゾードコス・ピギの図像」と言ったが、これは末期ビザンティン美術における重要な聖母図像であり、その成立に関しては極めて複雑な問題がある。ゾードコス・ピギ Ζωοδόχος Πηγήとは「命を与える泉」という意味で、聖母図像に付される<sup>エピセツト</sup>銘文として13世紀以降知られており、末期／ポスト・ビザンティン時代に人口に膾炙した<sup>(57)</sup>。クサントプロス自身は上記の『ロゴス』中で、アギアズマの天井にあった聖母図像をゾードコス・ピギとは呼んでいないし、聖母の身振りについても言及していない。それにも拘らずウスターハウトがこの図像をゾードコス・ピギと特定できる理由は、これに近い図像でゾードコス・ピギの銘を伴う図像がわずかに2例、ミストラのブロントキオン修道院附属オディギトリア聖堂（図6）とコーラ修道院



図6 ミストラ、ブロントキオン修道院附属オディギトリア聖堂ナルテクス



図7 墓H、コーラ修道院外ナルテクス

(図7)に現存するからである。オディグトリア聖堂自体の創建は1311年以前<sup>(58)</sup>であり、ナルテクス南西の礼拝堂入口上部にそれぞれ1312~1313年と1322年の勅令が描かれている<sup>(59)</sup>ので、ナルテクス全体のフレスコも1322年以前には仕上がっていたと考えられる。ゾードコス・ピギの銘を伴う図像としては最古のものである本作例では、胸のあたりに幼児キリストを伴う両腕を挙げたオランスのポーズをとる聖母の半身像が表され、両隣にはヨアキムとアンナが「デイシス」のような構図で配されている<sup>(60)</sup>。後代に扉口を開けた際に壁画の下部が損壊しているが、幼児キリストのすぐ下には水が描かれているので、本来は泉か水盤が広がっていたのだろう。コーラ修道院外ナルテクス北壁に穿たれた墓石のアルコソリウムにある作例<sup>(61)</sup>は、幼児キリストを伴わない。墓石には皇帝アンドロニコス2世の五男ディミトリオス・ドゥカスとその妻が葬られていたことが判明しているが、ディミトリオスが没したのは1343年以降であるので、テトリアトニコフの言説を信じるならピギのアギアズマのモザイクとさして時間差のない図像といえる。

新たにゾードコス・ピギの図像が創出されるきっかけとなったのは、「命を与える泉の聖母の祭日」が設定されたことであろうというのが定説である。この祭日は1306年には既に祝われており<sup>(62)</sup>、クサントプロスが著した『ロゴス』は「命を与える泉の聖母の祭日」のアカルティア(典礼指示書)でもある。『ロゴス』が成立したのが1308~1320年の間とされるので、やはりゾードコス・ピギの図像は14世紀初頭に創出されたということになるだろう。その後、ゾードコス・ピギの図像は短期間でセルビア・ロシア方面まで伝播した<sup>(63)</sup>。現存する作例の多くはナルテクスに配されており、ピギ修道院のようにアギアズマにこの図像を設置した例は筆者の知る限りイスタンプールのアマラル・タフディル通りの地下で発見されたアギアズマ<sup>(64)</sup>のみである。ナルテクスに描かれたのは恐らくその前で洗礼が執り行われたからであろう。

ゾードコス・ピギという言葉自体は聖母に捧げられたエピセツトとして9世紀ごろからビザンティンの讃歌に散見される。しかし、9世紀から13世紀までにゾードコス・ピギの名がつく他の図像は知られていない。つまり、名称の出現から図像化までの間に4世紀近くに及ぶ時間差がある。さらに、「命を与える泉」に連なる霊的な生命の源泉としての「泉」は、本をただせば詩篇36篇10節の「命の泉はあなたにあり [……]」をはじめとして、聖書、特に旧約聖書に頻繁に登場するモチーフである。初期キリスト教美術においてこうした泉は水を飲む2頭の鹿やその他の動物といった形でしばしば聖堂装飾に採用された<sup>(65)</sup>。しかし、中期ビザンティン美術以前に「泉」の描写は聖堂装飾から消え、六角形の建物や壺から流れる水などが写本挿絵として描かれるようになった<sup>(66)</sup>。ところが、聖母にゾードコス・ピギという賛辞が与えられたことで、「泉」はある時突然聖母の姿をとって表されるようになった。ヴェルマンスは一度途絶してしまった「泉」の聖堂装飾が、14世紀に1.) 泉に集う師父たち、2.) ゾードコス・ピギという2つの図像体系としてリヴァイヴァルを果たしたのだと論ずる<sup>(67)</sup>。なぜ泉が聖母の姿をしているのか、そしてゾードコス・ピギという特定の図像になぜ幼児キリストを伴うにしろ伴わないにしろ、オランスの聖

母半身像が選ばれたのか。

テトリアトニコフはゾードコス・ピギに先行する図像を形態が最も類似する全身像のオランスの聖母図像もしくは幼児キリストのメダイオンを伴うオランスの聖母図像とし、これらの図像はどちらもブラケルネ修道院に端を発すると推察した。というのは、ブラケルネ修道院の「浴室」にあり、コンスタンティノス7世ポルフィロゲニトスの記述によると「聖なる手から聖なる水が注ぎ出」<sup>(68)</sup>ていた大理石イコンが、オランスの聖母像を採用していたと考えられるからである。現在イスタンブール考古学博物館にあるイコン（図8）はほぼ同様の外観を呈しているとみてよいだろう。たしかに聖母の両手には穿孔があり、水が噴出する仕掛けになっている。ブラケルネ修道院の大理石イコンは金曜日ごとに皇帝の訪れを受けた。さらに、同じくブラケルネ修道院にあって多くの一次文献に記録が見える「金曜日に奇跡を起こす聖母イコン」も、幼児キリストのメダイオンを伴うオランスの聖母図像を採用していた可能性がある<sup>(69)</sup>。

テトリアトニコフはブラケルネ修道院からピギ修道院へと、この図像が「遷移」したと考え、その要因を両修道院の役割と典礼の類似性に求めた。プロコピオスが両修道院を外敵に対する首都の守護と捉えていたことは既に述べた通りである。また、元はブラケルネ修道院で祝われていた626年に聖母イコンがアヴァール人を撃退した故事を記念した典礼がピギ修道院でも行われていたこと、ピギ修道院の「命を与える泉の聖母の祭日」が復活祭後の金曜日にあたり、ブラケルネ修道院の「金曜の奇跡」を想起させることから、テトリアトニコフは二つの修道院には典礼上も繋がりががあると推定している。

ゾードコス・ピギに形態上最も近いのは幼児キリストを伴う半身のオランスの聖母像である。この図像は、11～12世紀のカメオや銀製メダイオン、聖職者や官僚が用いた鉛製の印章やパナギアリオン（聖母に捧げるための聖体を入れる小皿）など工芸品に多く見受けられる（図9）。パナギアリオンの形状は水盤に類似するため、ピギのアギアズマの水盤の真上を飾るモザイクとして本図像が選ばれたのでは



図8 《マンガナの聖母》、11世紀、イスタンブール考古学博物館



図9 パナギアリオン、アトス山、ヒランダル修道院

ないかとテトリアトニコフは言う<sup>(70)</sup>。

テトリアトニコフによる以上の推論は概ね当を得ているかもしれないが、ピギ修道院とブラケルネ修道院の役割や行われる典礼の類似性はさておいて、オランスの聖母図像が水と強い関わりを持ってビザンティン人の崇敬を受けてきた経緯は無視できないだろう。ブラケルネ修道院の浴室には、手から水を噴き出すオランスの聖母の大理石イコンがあったことは既に述べた。こうした噴水、アギアズマとして機能したと思われるオランスの聖母大理石イコンは少なくとも5例現存する<sup>(71)</sup>。他の聖母図像ではなくてオランスの聖母図像が大理石噴水イコンにまず採用されたのは、単に掌を観者側に向けて両手を挙げたその形態が水を噴き出させるのに都合が良かったから、という以上の理由ではないのかもしれない。しかし、オランスの聖母図像は確実にビザンティン人の心象中で水と結びつき、14世紀にゾードコス・ピギという新たな図像として結実するのである。

## 結 論

本稿ではピギ修道院のビザンティン時代における姿を、文献上の記録からできる限り復元することを試みた。修道院コンプレックスには主聖堂、洗礼堂、葡萄畑、そして宮殿があった。このうち最古の建造物は主聖堂であり、その創建は6世紀に遡るとみられる。帝都の住人の崇敬を集めたアギアズマを擁する主聖堂の構造と装飾についてはある程度再現を試みることができた。特に、ピギ修道院時代のクリプトを保持しているとされる現在のバルクリ・メリエマナ・ルム・マナスティルのクリプトに見られる2本の豎坑が、クサントプロスの『ロゴス』に登場する「覆われた水路」の2つの開口部である可能性を示した。本稿では推論の殆どを『ロゴス』をはじめとした一次文献に拠っているため、図3で示した再現案をより確かなものとするにはピギ修道院跡地の本格的な発掘調査が待たれる。

### 図版出典

図1 : R. Ousterhout, 'Water and Healing in Constantinople: Reading the Architectural Remains' in B. Pitarakis (ed.), *Hayat Kisa, Sanat Uzun Bizans'ta Sifa Sanati: Life is Short, Art Long. The Art of Healing in Byzantium*, Beyoglu 2015, 72.

図2 : K. Dark; F. Özgümüş, *Constantinople: Archaeology of a Byzantine Megalopolis: Final Report on the Istanbul Rescue Archaeology Project 1998-2004 directed by Ken Dark and Ferudun Özgümüş*, Oxford 2013, 111.

図3 : 筆者作成。なお作成にあたって早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程の渡辺玲氏にご協力いただいた。

図4 : B. V. Pentcheva, *Icons and Power: The Mother of God in Byzantium*, University Park 2006, 81.

図5 : G. A. Sotiriou, 'Βυζαντινά ἀνάγλυφοι εἰκόνες' in *Recueil d'études à la mémoire de N. P. Kondakov*, Prague 1926, 133.

図6 : 益田朋幸撮影。

図7 : Ousterhout (2015), 73.

## 命の泉の聖所

図8 : M. Vassilaki (ed.), *Mother of God: Representations of the Virgin in Byzantine Art*, Milano 2000, 239.

図9 : Vassilaki (2000), 244.

### 注

- (1) バルクル・メリエマナ・ルム・マナスティルとはトルコ語で「魚の聖母マリアのギリシア修道院」程度の意味で、1453年にオスマン軍がコンスタンティノポリスに侵攻した折、ピギ修道院の一修道僧が夕食のために魚を揚げていたが、帝都攻略に驚いた魚は半分火の通ったままでアギアズマに飛び込んでしまったという伝説がある (A. M. Talbot, 'Holy Springs and Pools in Byzantine Constantinople', in P. Magdalino, N. Ergin (eds.), *Istanbul and Water*, Leuven 2015, 172)。また、1327年にミハイル・ガブラスが弟ヨアンニスのピギ修道院における治療と死について書き記した文書によると、病状が回復しないヨアンニスは魚を食べよう指示されていた (*Ibid.*, 171; G. Fatouros (ed.), *Die Briefe des Michael Gabras (ca. 1290-nach 1350)*, vol. 2, Wien 1973, 699-705, ep. 457)。タルボットはこの魚が後の逸名ロシア人巡礼者が記録したアギアズマに棲息する魚だったのではないかという見解を示している (A. M. Talbot, 'Epigrams of Manuel Philes on the Theotokos tes Peges and Its Art', *Dumbarton Oaks Papers* 48 (1994), 138, note 15)。
- (2) A. M. Talbot, 'The Anonymous *Miracula* of the Pege Shrine in Constantinople', *Palaeoslavica* 10-2 (2002), 223.
- (3) R. Janin, *La géographie ecclésiastique de l'Empire byzantin*, première partie, tome 3, Paris 1969, 223-28.
- (4) プロコピオス『建築について』、1巻3章6-10節 (H. B. Dewing; G. Downey (eds.), *On Buildings*, Cambridge (MA) 1940)。
- (5) Dewing, Downey (1940), vol. 1, chap. 3: 6, footnote 3.
- (6) Janin (1969), 226. ただしヴァルター・ホッツはアギアズマが1833年に再建されたとする。W. Hotz, *Byzanz, Konstantinopel, Istanbul: Handbuch der Kunstdenkmäler*, Darmstadt 1971, 115.
- (7) ドゥカス『ビザンティン史』28章3節 (*Corpus Scriptorum Historiae Byzantinae* 20, Bonn, 184)。同箇所はH. J. Magoulias, *Decline and fall of Byzantium to the Ottoman Turks*, Detroit 1975, 162でピギ修道院に陣を敷いたのはマヌイル2世パレオロゴスの使者テオロゴスと解釈されているが、前後のギリシア語の文脈からするとムラト2世とした方が自然と思われる。
- (8) P. Gilles, *De topographia Constantinopoleos, et de illius antiquitatibus libri quatuor* 4, London 1561, 7; 214.
- (9) ベネーによると、1900年にピギ修道院の跡地に目にするのができるのは「裂け目が半分まで [礫などで?] 一杯になった三重の壊れた壁と、崩れかかっている塔 ('le triple mur délabré, avec ses brèches mi-comblées et ses tours croulantes')」であった。修道院の廃墟が細々と20世紀初頭まで存続していたと見ることも可能だが、この証言には疑問を挟む余地がある。ベネーは現実に忠実な記録を残したというより、懐古的な創作を行ったと解釈する方が無難であろう。S. Bénay, 'Le monastère de la Source à Constantinople', *Échos d'Orient* 3-4 (1900), 224.
- (10) これとは別に、ピギの名がつく宮殿には、バシリオス1世によって造営されたもの (τὸν Πηγῶν) もある。R. Janin, *Constantinople Byzantine: développement urbain et répertoire topographique*, Paris 1964, 142.
- (11) E. Kurtz (ed.), *Die Gedichte des Christophoros Mitylenaios* 4, Leipzig 1903, 66-68, nos.7; 105.
- (12) PG, 122, col. 1276 B. これをほとんど一字一句書き写した偽コディノス (14世紀、生没年不詳) の記述がPG, 157, col. 592にみえる。また、『パトリア』3巻142節 (A. Berger (trans.), *Accounts of Medieval Constantinople: The Patria*, Cambridge (MA), 2013, 198) にも同様の記述がある。
- (13) *Ibid.*, 121, col. 740 C.
- (14) *Ibid.*, 134, col. 1238 B.
- (15) *Ibid.*, 147, col. 72-77 B. なお、この箇所ではレオン1世が「聖なる声」に従って発見した泉の泥を傍らにいた盲目の男の目に塗りつけ、その結果男が視力を回復するという、オディゴン修道院の縁起に極めて類似し

たエピソードが語られる。

- (16) C. Mango, 'The Origins of the Blachernae Shrine at Constantinople' in N. Cambi, E. Marin, *Radovi XIII. međunarodnog Kongresa za Starokršćansku Arheologiju = Acta XIII Congressus internationalis archaeologiae christianae : Split - Poreč (25.9-1.10.1994.)*, Split 1998, 62.
- (17) Moffatt, Tall, Reiske (2012), xxiii.
- (18) Janin (1964), 142.
- (19) W. Müller-Wiener, *Bildlexicon zur Topographie Istanbuls: Byzantion-Konstantinupolis-Istanbul bis zum Beginn des 17. Jahrhunderts*, Tübingen 1977, 385.
- (20) Talbot (2015), 169. タルボットはこの引用箇所を A. Pamperis, *Λόγος διαλαμβάνω τὰ περι τῆς συστάσεως τοῦ σεβασμιου οἴκου τῆς ὑπεραγίας Δεσποίνης ἡμῶν Θεοτόκου τῆς ἀειζώου πηγῆς Leipzig 1802*, 11-13 から訳出。本文献のデジタル版と思しきものがクレタ大学図書館デジタルアーカイブ 'Anemi' (<http://anemi.lib.uoc.gr/metadata/6/a/4/metadata-39-0000327.tkl>) からダウンロード可能である。
- (21) *PG*, 147, cols. 76-77.
- (22) Janin (1969), 227.
- (23) *PG*, 92, col.1357 B. ジャナンは偽コディノスの挙げる年代を疑問視しており、修復が行われたのは790年ごろだったとしている。Janin (1969), 224.
- (24) *PG*, 109, col. 72-77 B.; Talbot (2015), 167.
- (25) Bénay (1900), 227. 根拠となる一次文献は挙げられていない。
- (26) *PG*, 109, col. 424.
- (27) Bénay (1900), 227.
- (28) Bénay (1900), 227; Janin (1969), 227.
- (29) 『儀典の書』 1 卷18章。
- (30) Talbot (2015), 169.
- (31) *Loc. cit.*
- (32) R. Ousterhout, 'Water and Healing in Constantinople: Reading the Architectural Remains' in B. Pitarakis (ed.), *Hayat Kisa, Sanat Uzun Bizans'ta Şifa Sanatı: Life is Short, Art Long. The Art of Healing in Byzantium*, Istanbul 2015, 74. 特にアギアズマの後壁がビザンティン時代の外見を留めているという。
- (33) Janin (1969), 226; Hotz (1971), 115. 1727年に再建された聖堂はほどなく破壊され、1821年にはイエニチェリの手でアギアズマが埋められた。
- (34) ただし段数がクサントプロスの記述と異なる。入手できた写真(図1)を見る限り、泉の左側の階段は5段、右側は7段である。
- (35) K. Dark, F. Özgümüş, *Constantinople: Archaeology of a Byzantine Megalopolis: Final Report on the Istanbul Rescue Archaeology Project 1998-2004 directed by Ken Dark and Ferudun Özgümüş*, Oxford 2013, 112.
- (36) *Loc. cit.*
- (37) Janin (1969) 巻末に綴じこまれた地図を参照。
- (38) A. P. Kazhdan (ed.), *Oxford Dictionary of Byzantium*, vol. 2, Oxford 1991, 1616 には 'hemorrhage' とある。一種の不正出血であろう。
- (39) Bénay (1900), 226.
- (40) *Loc. cit.*
- (41) 『宮廷詩歌集』 1 卷110篇 (W. R. Paton (trans.), *The Greek Anthology*, London 2014 (first published 1916), 71)。
- (42) Talbot (1994), 144.
- (43) Bénay (1900), 227. ただし出典は明らかにされていない。

## 命の泉の聖所

- (44) Talbot (1994) , 147-61.
- (45) Pamperis (1802), 60; 67; 83.
- (46) L. Gautier (ed.), *Les acta sanctorum; étude sur le recueil des Bollandistes*, Paris 1863, chap. 26.
- (47) *Ibid.*, chap. 17.
- (48) エピスケプシスの銘が付された最古の図像がこの図像タイプに当て嵌まる。V. Laurent, *Le corpus des sceaux de l'Empire byzantine: L'Eglise*, Paris 1963, no. 1785.
- (49) 菅原裕文「イコンが名に負うもの——コンスタンティノポリスのマリア聖所と奇跡のイコン」『アジア遊学』115号（2008年）、94-108頁。
- (50) この大理石イコンと、イコンに彫られた奉献銘文については G. A. Sotiriou, 'Βυζαντινὰ ἀνάγλυφοι εἰκόνες' in *Recueil d'études à la memoire de N. P. Kondakov*, Prague 1926, 125-138 を参照。
- (51) 英語訳では 'bubbles forth'。
- (52) N. Tetriatnikov, 'The Image of the Virgin Zoodochos Pege: Two Questions concerning its Origin' in M. Vassilaki (ed.), *Images of the Mother of God: Perceptions of the Theotokos in Byzantium*, Aldershot 2005, 225-6.
- (53) Talbot (2015), 169.
- (54) Tetriatnikov (2005), 225.
- (55) Ousterhout (2015), 74.
- (56) Tetriatnikov (2005), 227. テトリアトニコフがこの年代を特定するに至った理由は、アンドロニコス 2 世の治世24年目、つまり1306年にアギアズマへと下る階段の欄干を支えていた柱が巡礼の重みに耐えきれず、基部から折れて水盤に落下したという事件による。テトリアトニコフは事件後時を置かずしてクリプトの修復がなされたはずであると考え。前述のマヌイル・フィレスのエピグラムにはイラリオン・カナベスという名の僧が寄進した水盤が登場するが、この水盤がこの修復時に寄進されたものであるとタルボットは推定する。Talbot (2015), 169.
- (57) 末期／ポスト・ビザンティン時代までも含むゾードコス・ピギ図像の歴史については D. I. Pallas, 'Η Θεοτόκος Ζωοδόχος πηγή. Εικονογραφική ανάλυση και ιστορία τοῦ θέματος', *Αρχαιολογικὸν Δελτίον* 26 (1971), 201-224 に詳しい。ポスト・ビザンティンのイコンにおけるゾードコス・ピギ図像については富田佐知子「“聖母の癒し” 考——「生命を与える泉の聖母」イコンを中心に——」『美術史研究』第37冊（1999年）、1-22頁を参照。
- (58) Tetriatnikov (2005), 226.
- (59) G. Millet, *Monuments byzantins de Mistra*, Paris 1910, pls. 92-104; S. Dufrenne, *Les programmes iconographiques des églises byzantines de Mistra*, Paris 1970, 8, 41, n. 425.
- (60) この構図はレスノヴォ修道院附属大天使ミハイル聖堂の作例でも踏襲されている。T. Velmans, 'L'iconographie de la «Fontaine de vie» dans la tradition byzantine à la fin du moyen âge' in A. Grabar (ed.), *Synthronon. Art et archéologie de la fin de l'antiquité et du moyen âge*, Paris 1968, 131.
- (61) 本作例と「命を与える泉の聖母」という銘の詳細については益田朋幸「コーラ修道院の名称について」『美術史研究』第54冊（2016年）、34-36頁を参照。
- (62) Tetriatnikov (2005), 228.
- (63) 帝国各地における「命を与える泉の聖母」への崇敬の隆盛と本図像の伝播については T. Stabroucev, 'The Cult of the Virgin ζωοδόχος πηγή and its Reflection in the Painting of the Palaiologan Era', *Zograf* 33 (2009), 101-119 を参照。特に各作例に付される銘について詳しい。
- (64) F. Tülek, 'A Fifth Century Floor Mosaic and a Mural of Virgin of Pege in Constantinople', *Cahiers archéologiques* 52 (2005), 23-30.
- (65) Velmans (1968), 119.

- (66) P. A. Underwood, 'The Fountain of Life in Manuscripts of the Gospels', *Dumbarton Oaks Papers* 5 (1950), 41+43-138.
- (67) Velmans (1968), *loc. cit.*
- (68) 『儀典の書』 2巻12章。
- (69) この問題については B. V. Pentcheva, 'Rhetorical Images of the Virgin: The Icon of the "Usual Miracle" at the Blachernai', *Res: Anthropology and Aesthetics* 38 (2000), 35-55 で論じられている。
- (70) Tetriatnikov (2005), 231.
- (71) E. Ota, *Marble Relief Icons of the Virgin Orans*, MSc Thesis, University of Edinburgh 2012, 72.